

アメリカ警察国家に関する 10 の赤裸々な真理

July 12, 2014

GeoengineeringWatch (Source: John W. Whitehead, ActivistPost)



“どんな政府にとっても最も危険な人間は、自分でものを考え出すことのできる人間である。…自分がその下にいる政府は、不正直で、狂気じみて、耐えがたいという結論に彼が達するのは、ほとんど避けられない。” —H. L. Mencken、米ジャーナリスト

暗い展望の文学作品を、政府の手によって今我々が経験しつつあることの先触れだったと見ることが、いま流行であり、それは適切な見方でもある。確かに、ジョージ・オーウェルの『1984年』や『動物農場』は、政府の暴虐や腐敗や統制について、オールダス・ハックスリーの『すばらしい新世界』やフィリップ・K・ディックの『マイノリティ・リポート』と同様に、急所に触れるところが多い。しかしまた同時に、より古い、より単純な永遠の物語——民話やおとぎ話——の中に、市民や為政者としての我々の愚かさや落ち度を、暴君や独裁者を生み出すのに強力に働くものとして、教えてくれるものがある。

そのような物語の一つであるハンス・クリスチャン・アンデルセンの「王様の新しい服」の寓話は、アメリカという警察国家に、その今日の完全な例を見出すことができる。ただ帝国大統領がぜいたくな休暇や娯楽や、権力を強大するための疑わしい政府計画に気まぐれに金を浪費するという話でなく、アンデルセンの寓話では、派手好きで無思慮な皇帝が、人民の犠牲において、たとえそれが無慈悲な課税、彼の王国の破産につながり、彼の法令に従わない者たちを厳罰に処しても、自分自身の欲求を満たすことだけに関心をもつという想定

になっている。

この物語を知らない人のために言っておくと、虚栄に満ちたこの皇帝は、騙されて途方もなく高価な揃いの服を買わされるのだが、この服は、賢くて、有能で、自分の職に適している者だけに見えることになっている。イエスマンたち、職業的追従者、へつらい作り笑いをし、膝を曲げる者たちに取り巻かれたこの皇帝は、傲慢で、横柄で自分の裸に気づくことなく、この新しい服を着て、街を馬で堂々と歩くのだが、やがて一人の子供が、誰もが考えていたのだが、愚かで無能だと思われるのを怖れて誰も言わなかったことを言う——「あの人は何も着ていないじゃないか！」

この皇帝の王国の人民のように、我々もまた騙されて、もし怖くて言えないような、何か「デンマーク王国では腐っている」というようなことを、もし言ったりすれば、我々は、官僚や企業のトップ、政府のエリート、そして現状維持——少なくとも現状維持の見かけ——を使命とする——メディアの才子に、低能、愚か者と烙印を押されるだろうと信じていた。しかし真理は、皇帝が服を着ていないという事実と同じくらい確実に、我々の顔を覗き込んでいる。

真理 1 : アメリカは破産の瀬戸際に追い込まれている——多くのエコノミストがずっと前から警告していたように——外国籍者や企業のかかえる 16 兆米ドル以上もの負債によって。ある金融ニュース・サイトが報告している通り、「国際的に、世界は Fed（連邦準備銀行）とアメリカ政府の恥知らずの負債増大に飽きあきして（fed up）いる。中国、ロシア、イラン、インド、その他多くの国家が、米ドルを完全に避けて通る通商関係を取りきめつつある。これはやがて、世界の準備通貨が購買力や地位を失うという動向を意味する。この近未来に迫った崩壊に備えて、津波がやってくる前に、富を保存しようとして、ベルリンから北京に至るあらゆる私人・公人によって、金が蓄えられている。」

真理 2 : 我々はもはや「人民の、人民のための、人民による」政府をもっていない。我々が今もっているのは、富裕な領主によって経営され、ますます軍国主義化していく警察に監視される下層階級の血と汗と労働によって財政的に支えられた、封建君主国家である。この情けない事態は、平均的な市民は、政策立案過程に「ほとんど全く独立した影響」を与えていないことを発見したある研究によって、確証されている。Political Research Quarterly に発表された同じような研究は、米上院議員は、彼らの選挙民の最も富裕な層を代表するもので、経済的ランクの最下層にいる人々を無視していることを明らかにした。

真理 3 : 政府は、健康、安全、安全保障など、市民の福祉に関心をもつ善意の主体であるどころか、それはただ 3 つのこと——権力、統制、カネ——だけに関心をもっている。よく

引用される言葉だが、「政府は理性ではない、それは弁論ではない、それは力だ。火のように、それは危険な従僕であり、恐ろしい主人である。」不幸なことに、かつては“我々人民”に応える政府をもっていた、この主人－従僕関係は、逆転してしまった。政府諸機関はいま、自分たちが主人であり、我々が従僕であるかのように振舞う。これが最もよくあらわれているのは、警察官が、平和の善意ある守護者から、バッジの権力を笠に着た、軍隊の非情な一部になってしまったことだ。

真理 4：政府にとって我々が役立つのは、主として消費者、働き蜂としてであり、また収集・整理・統制されて、情報として蓄えられ、最高値を付ける人々に、我々を売りつけるためである。大企業と共謀して、政府は自らに、我々の電話番号、eメール、銀行取引、物理的移動、徒歩や車の旅行までもアクセスできる、白紙委任状を獲得した。サイバー安全の専門家であるリチャード・クラークは、我々の生活のあらゆる側面のデータが収集され分析される、未来がありうると言っている。したがって米最高裁がいかにかそれを否定しても、政府はもはや、あなたの携帯電話活動やその他何でも、スパイするための令状は必要でなくなる。ワシントン・ポスト紙が最近明らかにしたように、NSAの監視網に引っかかった人の10人に9人は、彼らのプライバシーに踏み込まれるような悪いことはしていないと言っている。明らかに政府は今、比較的自動的に、法廷、議会、人民の意志、憲法などに縛られることなく活動し、自ら答えを出している。

真理 5：不法移民の大量の国境越えについて我々が取り組んでいるすべては、国境線が穴だらけだという事実にはほとんど関係なく、政府自身の怪しげなアジェンダにもつばら関係がある。道路や公海や空路をロックダウンすることのできる政府が、不法にアメリカに越境する何万という女性や子供たちを、防ぐことができないとはどういうことか？ 好都合にもオバマ政府は、議会に対し、3,800万ドルの緊急予算を請求し、より多くの移民裁判官を南の国境に送り、収容施設を増設し、国境パトロール隊を強化しようとしている。その資金は、法務、米国土安全保障、State and Health, Human Services 各省など、警察国家への急速な転換を担当する省庁から支弁されるようになっている。

真理 6：アメリカ政府は、ほとんど確実に経済的メルトダウンから生ずる、巨大な国内暴動に備えている。政府は繰り返しその意図を明らかにしてきた——“米国内での暴力的な戦略的混乱”に軍が備えるように警告する「米軍戦争カレッジ報告」を通じて、また、全米の都市で行われている軍事訓練を通じて、また、可能性ある国内養成の“異端者”や過激派の似顔絵を作ることを通じて、また、全国に建てられている拘置センターの増設を通じて。

真理 7：Gerard Ford が警告したように、「あなたが欲するすべてを与えるほどの大きな政府は、あなたのもつすべてを奪うほど大きな政府でもある。」あまりにもしばしば、アメリカ

カ人は、自分に困ったことがあると、それが金銭問題、健康問題、子供の世話など何であろうと、これを政府に面倒を見てもらおうという誘惑のとりこになってきた。その結果として、我々はいま小説『キャッチ・22』のような状況に落ち込んでいる——いわゆる我々の問題に対する政府解決がさらに問題を悪化させるというように。このようにして、学校でドラッグや武器を違法とするように意図されたゼロ・トレランス政策が、兵士の絵を描くとか、泣きすぎるといった子供らしい振舞いのために、その子が逮捕されて放校になるというような結果を生んだりした。また、学校で子供に秩序を守らせるための“怠け防止法”が、親の逮捕と重い料料という結果になったとか、自宅所有者を保護するための“ゾーン法”が、グリッド外で生活しようとする居住者を告発するのに利用されたこともある。

真理 8 : アメリカは細部に至るまで、完全にナチスの設計図に従っている——重装備した政府の要因としての襲撃隊のような警察から、アメリカ人だけでなく残りの世界を呑み込もうとする、NSAの“Five Eyes”（豪、カナダ、ニュージーランド、英、米の監視連合）のような電子強制収容所にいたるまで。中でも最もおぞましいのは、米国土安全保障省が国家警察の役を自ら任じていることで、これは常設軍とも呼ばれ、かつて人類に大災厄をもたらした、あらゆる全体主義体制の基本的な末端の構成部隊である。実際、今日政府によって進められている、謀略や脅し政策など、あらゆる暗黒街的行動は、米国土安全保障省とその精神構造、そして、助成金の形で警察機関に分配される何兆ドルというカネから発するものである。

真理 9 : 米政府は、自分自身の市民、特にその権威に非暴力的に立ち向かう人々に対して、SWAT（特別火器戦術部隊）の急襲、軍隊化された警察、巡回するVIPR（可視的な、統合輸送による予防と反応）のチェックポイントなどの形で、組織的な、システム化された暴力を行使することを、恒久化しているだけではない。彼らがこれら明らかな“第4修正条項”の侵犯を許されている理由は、法廷が彼らに、悪業の免除を与えているからである。その及ぶ範囲を広げようと、米政府はまた、武器販売や、地球警察としての軍隊の使用を通じて、他国にもその暴力を大量輸出している。にもかかわらず、いかによく訓練され、装備され、資金が豊かであっても、アメリカは世界を力で従わせることはできない。歴史が示す通り、軍事帝国は一度拡張しすぎると、必然的に混乱へと崩壊する。

真理 10 : 私が著書 *A Government of Wolves: The Emerging American Police State* で明らかにしているように、アメリカ合衆国は今、新しい戦場になった。実は、今日アメリカ政府が戦っている唯一の本当の戦争は、アメリカ人民に対する戦いであり、それは、恐ろしい武器、軍隊化された警察、監視技術、合法的なはずの活動を犯罪とする法律、分け前システムを左右する個人的牢獄、それに法律のルールに従わなくてもよくなった政府官僚による戦いである。

これが現状である。これは小説でなく事実であり、あまりにも赤裸々で、子供でも見ればそれとわかるものである。にもかかわらず、それは政治的に都合が悪く正しくなく (“politically incorrect”)、快適なものではないので、あえてこれを口にする勇気のある人はほとんどいないのである。

そうだとしても、誰も頭が悪いとか、陰謀論を信ずるバカだとか、右翼の変人だとか言われたくないとしても、ほとんどのアメリカ人は、過去数十年にこの国で起こってきたことに本当に注意を払い、(少なくとも自分に対して) 真実であろうとするならば、この現状がきわめて不気味なものであることを認めざるを得ないだろう。現実問題として、もし近い将来に良い方へ向かう何らかの激的な変化が起きなければ、このおとぎ話は、よい結末にはならないと思われる。

(憲法弁護士、作家の John W. Whitehead は、この論文が最初に現れた The Rutherford Institute (リンク) の創設者・所長である。著書に、前掲『狼たちの政府——台頭するアメリカ警察国家』と *The Change Manifesto* がある。)